Fate/ wild order

黒城優輝

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大いなる封印の中で愉快な仲間達とダラダラ過ごしていた湊君に人類史焼却が告げられる。果たして湊君は再び世界を救えるのか⁉？

湊「…正直めんどくさいけど頑張る」

…救えるのか⁉？

目　次

本編入る前のキャラ設定紹介　――　1
エリザベス「もう一回世界を救ってくださいませ」湊「酷い無茶振りを見た」
5
A．D．２００４　炎上汚染都市　冬木
序章
第１節　湊「第１生存者発見！」オルガマリー「あなた誰なのよ！」　――　19

本編入る前のキャラ設定紹介

有里　湊（ありさと　みなと）

ペルソナ3の主人公にして本作の主人公。

大いなる封印の中で愉快な仲間達とだらだら過ごしていたところに、突如エリザベスが現れ「人類が何者かに滅ぼされたのでもう一回何とかしてくださいませ」と無茶振りをして去っていった。

ぶっちゃけ人類が滅ぼうがどうでもいいが、かつての仲間や友人が死ぬのは看過出来ないと重い腰を上げる。

望月　綾時（もちづき　りょうじ）

湊君と愉快な仲間達その1。

黄色いマフラーがトレードマークの通称エキゾチックナンパ師。

その正体は死の概念の端末”Ｄｅａｔｈ”

そこら辺の詳しいことは是非ゲームをプレイしてほしい。

会う女性サーヴァント全員に粉を掛けるがたまにしばかれる。でもめげない。

ニュクス
湊君と愉快な仲間達その２
黒髪ロングのスタイル抜群黒羽女神。
本来は死の概念であり自我など無いのだが、大いなる封印…もとい湊の心を通じて人のことを学習し、人の殻と自我を持つようになった。
眼を開くとロクなことにならないので常に眼を閉じている。
当然留守番である。

ジャックフロスト
湊君と愉快な仲間達その３
湊の心に宿るペルソナの１柱。あだ名はヒーホー君。
いじられ役担当。

アリス
湊君と愉快な仲間達その４
湊の心に宿るペルソナの１柱。ドＳ幼女。

湊の生前の悪ふざけによって、ステカンスト。
スキルも厳選されている。
光無効・メシアライザー・サマリカーム・死んでくれる?・ムド強化・プララヤ・アカシャアーツ・明けの明星
と、俗に言う,,うわようじょつよい,,状態。

アンリ
湊君と愉快な仲間達その5
いつのまにか大いなる封印の中にいた。
顔立ちは日本人だが、半裸色黒で全身にめっちゃタトゥー入れまくって頭に赤いバンダナを巻いてる気合の入ったファッションをしている。
本人曰くエレボスの親戚らしい。
最近の趣味はヒーホー君をからかうこと。
人類が滅んだ状態で封印の外に出ると存在証明を確立出来ないとか何とかでｇｒａｎｄ　ｏｒｄｅｒには参加せず留守番。サボりである。

マユ

湊君と愉快な仲間達その6

アンリのあんちくしょうが連れてきた女の子。自称湊の嫁。

その正体は、生前湊が関係を持っていた女性たちの愛とか未練とか独占欲とか嫉妬とか修羅場パワーとかの集合体にアンリが人の殻を被せたもの。

アンリが言うには、「そのまま放っておいても良かったけどよぉ、時空を捻じ曲げて大いなる封印の扉の前に来ちゃうほどのラブ？

うん、そんな綺麗な想いもここに放っておいたらそのうち復活するエレボスに取り込まれちゃうじゃん？

だーかーらー！俺がチョチョイっと身体をプレゼントしたって訳！俺様チョー優しい！（ゲス顔）」

基本戦闘力皆無の良妻賢母だが、アンリが調整したせいで狂化ＥＸである。ヤンデレである。ちなみに殻のデザインは某ヤンデレアイドルである。

泥棒ネコ絶対殺すウーマン。

エリザベス「もう一回世界を救ってくださいませ」湊「酷い無茶振りを見た」

「もう一度世界を救ってくださいませ」
「はい？」
なぜ平和な我が家のダイニングでいきなりこんな無理難題を突きつけられているんだろうか？
ていうかエリザベスさんいつ来たの？
僕は心を落ち着けるために紅茶を口に運ぶ。
よし落ち着いた。
まずは、なぜこうなったのか現実逃避…ではなく、現状を整理するためにも順に思い出していこうか。
ホワンホワンホワーン…

…僕の名前は有里　湊。
享年１７歳のペルソナ使い。
紆余曲折あって死の概念ことニュクスを自分の命を使って封印。紆余曲折のとこは蛇足になるので省略。
本当は幾ばくかの寿命を使えば事は済んだけど、ある意味で僕の兄弟でもあるニュクスの端末、Ｄｅａｔｈこと望月　綾時君がひとりぼっちになってしまうので一緒に封印されることにした。
…というのは建前で最大９股という自分でもびっくりな女性関係を無理矢理清算するために封印の中に逃げたというのが真実。
…綾時には絶対に知られてはいけない。
その綾時はというと、となりのリビングでウノをしてる。ふざけんな。助けろ。
そんなこんなで始まった封印の中での生活。
はじめのうちは大変だった。何もない真っ新な空間に野郎と２人きりでしかも上にはニュクスが浮いてる。そんなでも修羅場よりはマシだけどね！
とにかく、そのままでは生活がままならないのでユニバース的な奇跡を使って家具やらご飯やらを作っていく。

大いなる封印は言ってしまえば僕の心そのものなので想像したものは割と簡単に出すことが出来た。

が、所詮想像の創造。家具は記憶している構造があやふやなため色々不具合があったり、出した食事の味が普段食べているものほど記憶が曖昧で微妙。まともに再現出来たのは修学旅行先の旅館にあった変わり種ジュースくらいだった…

しかも創造しようと集中しているときに限ってドアバンされる。エレボスさんマジでウザい。

そんな試行錯誤の毎日だが、ある日パタリとドアバンの音が止んだ。そのかわり激しい戦闘音が聞こえる。

ドアスコープから外を見てみるとかつての仲間達がエレボスと戦っていた。でもなんか知らない顔も増えてるし、アイギスのペルソナルシファーだし思わず『何ぞコレェ？』と言ってしまうのも仕方の無いことだろう。

しばらくして戦闘も特別課外活動部の勝利で終わり、なんか扉にオシャレ&気持ち程度の自己顕示欲で付けた僕の像を見てなんか泣いちゃってた。

すっごい罪悪感。自己犠牲とかじゃないから！それシャレオツなインテリア的なやつだから！マジで泣かないで！修羅場が怖くて逃げただけなんです！

と、1人で銀魂的モノローグを頭の中で垂れ流していたらなんか決意表明して外に向

かっていった。…ていうかみんなどうやってここに来たんだろう？

それからしばらく…さすがに野郎２人では潤いが無いということで、ペルソナのアリスとジャックフロストを常に呼び出しておくことにした。

アリスちゃんや、ヒーホー君にその黒胡椒のジュースを飲ませるのはやめてあげなさい。

アリスがヒーホー君をからかうのを優しく見守るのが日課になりつつある怠惰な日々。

綾時から、唐突に擬人化したニュクスを『僕のママンだよ！』なんで紹介されたりもしたが至って平凡な日常の中、奴は現れた。

奴の名はアンリ。エレボスの親戚とのたまう真っ黒黒助である。

奴はこの封印内を見て一言、『何これ？よくこんなんで暮らせんな？』ふざけんな。これでも頑張ったんだよ！

だが、奴の次の一言で、封印内での生活は革新を迎える。

『聖杯でもありゃもうちっとマシになんだけどなぁ？え？なに？持ってない？そりゃ残念！俺ので良ければ貸してやろうか？ただし中身は真っ黒な泥入りだけどな！』

やだ僕聖杯持ってる。

聖杯ルシファー。

今までなぜか剣として使ってたこれ。ユニバースと組み合わせて何とかならないかな？

はい、なんとかなっちゃいました。とりあえず家具家電付き一軒家を作ったよ。

アンリは『おいこら！救世主様はなんでもありかよ！つっまんねー…』と言いながらソファーでグデーとしてた。ていうかマジでお前誰なんだよ。どっから来たんだよ。てか帰れよ。

ちなみにそんなアンリは今リビングでウノをしてる。アリスと共謀してヒーホー君にリバースとスキップのフルボッコだ。やめてあげて！綾時も苦笑いしてないで助けてあげて！

「あなた？紅茶のおかわりはいかがですか？」

ふと、同居人の少女から声をかけられ思考の海から現実へと引き戻される。

彼女はマユ。アンリが創り出した妄執の少女。僕が関係を持っていた女性の想いの集合体。

なにが『1人にまとまれば迷わなくて済むだろ？（ゲス顔）』だよ！彼女の目を見てみろよ！光が無いよ！エリザベスさんに向ける視線が死線になってるよ！今まで気づかなかったけどめっちゃ嫉妬深いねこの子！

「うん、頂くよ」
　とりあえず平静を装って紅茶を入れてもらう。てか、あなたって呼び方やめてって言ったんだけどなぁ…紅茶のおかわりもエリザベスさんには聞かないし…
　エリザベスさんも心なしかピリピリし始めたよ。
「つまりどういうこと？詳しい話を聞かせてもらってもいい？」
　ここで喧嘩になるのはよろしくない。話の続きを促すことで、エリザベスの注意をマユから僕へと変える。
「そうですね…実は…わたくしにも理解出来ない現象が地球上にて発生したのです。」
「現象？」
　いまいち要領を得ない。一体地上で何があったのだろうか？
「そう、あれはわたくしがパリ市内を散策していた時のこと」
「やだこの人職務放棄して旅行とシャレこんでる」
「問題ありません。しかと，ゆうきゅうとどけ，なるものを主の目の届く範囲に置いておきましたので…話が逸れましたね」
　それ事後承諾…まあいいや。これ以上話の腰を折るのもあれだし…イゴールさん頑張れ！
「すみません。続きをどうぞ」

「はい、とにかくパリは、わたくしがヴィウ・ラ・フランス！と心の中で思わず言ってしまうくらい素晴らしい所でしたが…」
「でしたが？」
「わたくしがヴィウ・ラ・フランス！と心の中で唱えた瞬間、激しい光により視界が真っ白に染まり、わたくし思わず目を閉じてしまいました」
「……」
「そして再び目を開けた時、わたくしの目に映った景色は…」
「……」
「焼けた世界。何もかもが焼け落ち、人も文明も跡形も無くなっておりました」
「はぁ⁉？まさかエリザベスさん何かやらかしたんですか⁉？」
「いえ、わたくしではございません。そしてわたくし、幸か不幸か…間違いなく不幸なのでしょうが…とにかく周囲に人の気配も無いので、力を使い辺りを捜索してみたのですが…」
「…何も無かった？」
「イクザクトリイでございます。パリ市内、フランス、ヨーロッパはおろか、世界中、地上地下海山問わず、どこを見ても火の海でございました…ただ…」
「ただ？」

「別の時間。過去を遡ること西暦２００４年」
「意外と最近だね」
「はい。その時間に、僅か２人ではございますが人の存在を探知いたしました。恐らくは訳知り顔でございます」
「つまりそこに行って話を聞いてこいと」
「いえ、正確には現地の方と協力して原因の究明とその解決をお願いいたします」
「うわぁ…」
　すっごいハード。向かう先は世紀末とかそれなんて北斗？
「ま、仕方ないか。じゃあ準備してくるよ」
「ッ‼？まさか二つ返事で引き受けていただけるとは！よろしければ理由をお聞かせいただいても？」
「ぶっちゃけ人類が滅ぼうがどうでもいいけど…かつての仲間や友人の未来が奪われるのは嫌だってだけ」
「左様でございますか…世界でなく友のため。誠貴方様らしい選択でございます」
「じゃあ僕は着替えてくるから…綾時は付いて来れるのか？」
「え？僕がどうしたんだい？」
　綾時のことを話題に上げると食いついてくる彼。一応こちらの話に耳を傾けていた

ようだ。
「今から世界救ってくるけどみんなはどうするって話」
「いや、僕は,,Ｄｅａｔｈ,,なんだよ?･そう簡単には出られないさ」
「それならわたくしにお任せを。わたくし、世界を回っている際に、,,さーぅぁんとしすてむ,,という魔法を習得致しました。これを使えばＤｅａｔｈの権能を抑えることが可能でございます」
　確かにそうだと綾時の言い分に納得していると、エリザベスさんから解決策を提示される。
　…カタコトなんですけど大丈夫なんですかね?
「面倒なので詠唱は破棄なのでございますよ!取り出したるはアサシンモニュメント。あ・ソーレ!･」ドゴォッ!
「ガフゥッ⁉?･」
「綾時が死んだ⁉?･」
　唐突に放たれるエリザベスさんの掌底。
　綾時の土手っ腹に押し込まれるアサシンモニュメントとやら。
「これで完了でございます」
「……」ピクピク…

お腹を抱えて床にうずくまる綾時。ものすごく痛そう。

「……」

これ、僕のセリフじゃ無いんだけど言わせてほしい。

そっとしておこう。

着替え＆荷造り中……

「さて…これで準備よしと」

ヒーホー君とアリスを心の海に戻し、スウェットから月光館学園の制服に着替え、当時持っていたアイテムや装備品をこれでもかとポケットに詰め込む。我ながら意味不明な容量のポケットだ。

「はぁい！マユも準備完了です！」

…どうやらマユも付いてくるらしい。いつ創ったのか、ピンクのキャリーケースまで用意してあるよ…

「綾時は大丈夫？」

「なんとかね…でも当分戦闘は無理…」

仕方ないねという許容の心。

「マジか…んで、アンリは準備してないけど来ないの？」

「んあ？あー…俺ってばさ？エレボスと一緒で悪意の塊じゃん？んで、その悪意の発生源である人類がいない状態で封印の外に出ちゃうとさ、悪意が無い＝俺の存在も無いってことになっちゃうんだよね。だから留守番。

まっ、せいぜい頑張れよ！」

「…サボりか」

「ちげえよ！」

まあアンリはどうでもいいか…

「往くのですね…」

「ッ‼？ニュクスさん…」

エリザベスさんにどうやって目的地まで向かうのか聞こうとしたところに、いきなりニュクスに声をかけられる。
この人気配が無いから心臓に悪いんだよな…
「再び旅路に赴くあなたに餞別を…」
というと…おもむろに普段髪で隠れている僕の左目に…

「チュッ」

キスをした。
ズキンッ!!
「うっ!??グッ…グァァ!」
目に走る痛み。
「うっ…ハァハァハァ…」
それも一瞬で治まるが…左目に異常に高い魔力を感じる。
「死の視線（アイ・オブ・ザ・ニュクス）とでも名付けましょうか…私の権能をその目に魔眼として宿しました。使いどころを間違えないように…」スゥ…
「…ありがとうございます」

…どうしよ。なんか厄介なもの貰っちゃった。これはもう髪型変えられませんね…

「挨拶はお済みになりましたか？」

「ああ。で、どうやって行くんだ？」

「封印の扉と彼方側を一時的に繋げておきましたので、扉を通るだけでございます。ただし大いなる封印の在り方の都合上一方通行でございます」

「なるほどな～」

簡単でいいね。

「封印の管理はわたくしとアンリ様で行いますのでご心配なく」

「えっ？俺もやんの⁉？」

…ちゃんとやってくれよ？

「じゃあ後のことは頼んだよエリザベス」

「はい、承りました」

「よし、行こうかみんな！」

「はーい！」

「お～…」

マユはいい返事だが綾時はまだ痛むのか…

ガチャン！ギイィィィ…

大きな音を立てて封印の扉が開く。

さて、人類なんて本当はどうでもいいんだけど…かつての仲間のためにも頑張りますか。

A・D・２００４　炎上汚染都市　冬木　序章

第１節　湊「第１生存者発見！」オルガマリー「あなた誰なのよ！」

「よっと…」
「うわぁ～こりゃ凄いや…」
「こんなとこにずっといたらお肌が荒れちゃいますぅ…」
　やって来ました２００４年。
　聞いてた以上に聖飢魔ＩＩ。ゆあっしょー。
「キャアーーーーー！」
　特に当てもなくぶらぶらしていると、女性の悲鳴が聞こえてきた。
「うん？悲鳴？」
「エリザベスさんの言ってた生存者かも知れないよ？湊君、行ってみよう！」
　拠点探しからやりたかったが仕方ない。

「何なの、何なのよコイツら⁉?なんだってわたしばっかりこんな目に遭わなくちゃいけないの⁉?」
崩壊した街をひた走る銀髪の女性。
その後ろには武器を持ったガイコツが複数。
所々煤や埃で汚れているその姿を見るに、それなりの時間この世界で逃げ回っていたのだろう。
「〜〜〜!」
時折何か呟いて、指先からエネルギー弾の様なものを飛ばしてガイコツを迎撃するが、いかんせんガイコツの数が多い。一体潰したところで事態は好転しない。
「キャアッ!」
そんな中、彼女は瓦礫に足を取られ転倒してしまう。
「もうイヤ、来て、助けてよレフ!いつだって貴方だけが助けてくれたじゃない!」
とうとう彼女はその場で立ち上がろうともせず泣き出してしまい、レフという人物に

助けを求める。
…仕方ない。彼女から感じられる魔力的に、これくらいはなんとか出来ると思っていたんだけど…行きますか。

「何なの、何なのよコイツら⁉？なんだってわたしばっかりこんな目に遭わなくちゃいけないの⁉？」
ああ、いつだって私はついてない。
アニムスフィア家という魔術の名門に生まれた。才能だって持ち合わせていた。将来は父の跡を継ぐつもりだった。
でも、それは今すぐじゃない。私はまだ未熟だ。魔術師としてではなく人として。
でも、それは不意に訪れた。
敬愛する父の死。そのせいで私は急遽アニムスフィア家の当主となってしまった。
父の起こした事業…特務機関カルデア。

私は皆に認められようと、父の残したカルデアを引き継ぎ組織の運営に当たった。
…毎日が辛かった。誰も私を認めてくれない。誰も私を褒めてくれない。
それどころか、見つけてしまった極秘資料に記されていた非人道的な実験。
父はこんなことまでしていたの…？
全てが嫌になった。食事も喉を通らず、部下や物に当たる日々。
そんな時、支えてくれたのはレフだった。
彼だけが私を助けてくれた。
レフのおかげでどうにか持ち直し、カルデアスを観測する毎日。
だけどある日、カルデアスから文明の光が消えるという異常事態が発生した。
この緊急事態に私はすぐさまスタッフを集め原因を調査。その結果、２００４年の日本の地方都市に異常が確認される。
これはチャンスだと私は思った。文明の光が消えるということは世界が滅亡したという証拠だ。この原因を取り除き、カルデアスに光を取り戻せば…
私は世界を救った英雄になれる。
亡き父の伝手まで使って揃えた一流の道具（マスター適性者）。
レフに手伝ってもらいながらやっとの思いで完成させた霊子転移（レイシフト）技術。
残念ながら私にはマスターとしての適性は無かったのだけれど…まぁいいわ。

（それについては、危険を冒す必要もなく成果を上げられると考えましょう）

とにかく、私に出来る限りの事はやったわ…

だけど結果はどう？

レイシフト直前で謎の爆発事故。

そして、本来適正のない私がレイシフトしていて、周りは炎と骨の怪物（スケルトン）だらけ。

しかも私に襲いかかってくる始末。

「～～～！」

こんなはずじゃなかったのに！

ヤケになりながら魔術を使いスケルトンを迎撃し、走る。

ひたすらこれの繰り返し。

「キャアッ！」

痛いッ！なんでこんなとこに瓦礫が転がってんのよ！もう最悪！なんで私ばっかりこんな目に遭うのよ！

「もうイヤ、来て、助けてよレフ！いつだって貴方だけが助けてくれたじゃない！」

涙が止まらない。いないと分かっているのに思わずレフに助けを求める。返事など無いと分かっているのに。

結局誰も私を助けてくれない…私は諦めて目を閉じた。もうどうでもいっか…

「ハァァッ!」
ザシュッ!
…あれ?
恐る恐る目を開ける。
目の前には、怪物を斬り捨てるブレザータイプの学生服を着た少年。その隣には黄色いマフラーを身につけた少年。
スケルトンに斬りつけられると思っていたら、目を閉じた僅かな間に私の前に現れたみたい。
「レフって人じゃなくてゴメンね?チャチャっと片付けるからちょっと待ってて」
「はーい!お姉さんはマユと一緒に下がってましょうね〜?」
「⁉?⁉?」
急展開に頭がついてこない。
「なんだか汚れちゃってますね。ウェットティッシュ使いますか?」
私を後ろに下がらせた少女にウェットティッシュを渡される。
「あ、ありがとう。あの…あなた達は?」
「それは湊さんの戦闘が終わってからゆっくり話しましょうか?それより、今のうちに身嗜みを整えちゃいましょう!」

そういうと彼女は持っていたキャリーケースから櫛を取り出して私の髪を整え始めた。
「え？ちょっと⁉？それくらい自分でやれるわよ！」

マユと女性が下がったのを確認し綾時に声をかける。
「とりあえず半々で」
「了解。僕は右から叩くよ」
敵の数は１０。綾時と敵の倒す数を折半し、僕は左からガイコツの群れに突っ込む。
「ふっ！」
ザシュッ！
グオォォ…
今使っている剣は，，デオスクシポス，，。
四大天使のミカエルが使っていたとされる神の剣だ。

その聖なる力のおかげで、特に苦労せずガイコツは塵になっていく。
「よっと」
ガアァァ…
５体目を倒し綾時の方を見ると、どうやら向こうも終わったようである。
肩慣らしにもなりゃしない。

「さて…マユー！終わったよー！」
敵を倒し、安全を確認した後、離れていたマユを呼び寄せる。
「はーい！あなた～！お疲れ様♡」
「…助けてくれてありがとう。それで！あなた達は何者ですか⁉？」
うん。お礼は大事。古事記にも書いてある。
正直発狂してないか心配だったけどこれなら大丈夫だろう。
「まぁ慌てないで。僕、生存者に会ったら言いたいことがあったんだ」
「なんだい湊君？藪から棒に？」
「じゃあいくよ…」
「ワクワク…！」
「えっ⁉？ちょっと待って⁉？私ついてけないんだけど⁉？」

「第1生存者発見！」
「笑コラか～い！」
「わぁ！マユ、ダーツの旅だぁい好き！」
「え？何それ？私知らないわよそんなの⁉？それよりあなた達は何者なの⁉？」
「…次回へ続く！」
「お願いだから私の話も聞いてー！」